

## ミキ先生の思い出

橋 口 純 子

ミキ先生がお元気で、毎日大学に来ておられた頃、私はまだ学生でしたので、当時の私にとって特に印象に残っていることは書いてみようと思います。

一つは、入学式の祝辞の中で、

「皆さんは、最高学府に入学を許されたのですから、この進学にあたり、御両親に対する感謝の気持ちを忘れてはいけません。」

と、おっしゃったということです。それまで大学進学を当然のことと考えていた私は、はっとしました。大学に行かなくても立派な社会人になっている人の中で、親の精神的、経済的援助によって大学生という猶予期間を与えられるのだということを、改めて自覚することができ、その後の学生生活にも示唆を与えられたことばでした。

もう一つは、日頃のミキ先生と学生との遣り取りの間からのものです。

当時は学生にとっても、先生と接する機会は多くありました。廊下で、中庭で、女子トイレでと、言葉遣い、ドアの開閉、靴の履脱等、よく注意を受けていました。また、休日にサークル活動等のため学長室まで鍵を借りに行

く時など、人伝に聞いた「正しい鍵の借方」を事前に練習して行くのですが、入室の方法、声の大きさ等必ずどこか指導を受け、なかなかうまくゆかないものだ、と友人同士で溜め息をついたものでした。

このようなお小言だけでなく、とにかくよく声をかけてこられました。私もサークルの帰りに、暗くなるまで何をして過ごしていたのかと尋ねられたことがありました。

今思い返してみると、ミキ先生はなるべく多くの学生と、しかも一人ひとりに向き合う機会を持つとされていったのかもしれませんが。また学生にとっても、へ学長先生に直接叱られたことを、ある種の興奮をもって友人達に報告（自慢？）し合っておりました。

こういった学生との遣り取りの中で、

「私を見ると、廊下のむこうで反転して行ってしまう学生がおる。その学生は、私の近くに行くとか何か小言を言われると思うて避けているつもりだろうが、それは、その学生が自分の良心に恥じるところがあるからだと思ふとる。」

という内容のことをおっしゃったのです。この時も、ミキ先生の深い洞察力に驚いたことを覚えています。

私はミキ先生から「本当の厳しさ」を感じています。それは、学生だけでなく御自分にも厳しくあられたように思えるからです。例えば、小言一つとってみても、大勢の学生を相手にいつも言い続けるということは、注意を与える側にそれだけの信念と根気と学生を正しく導こうと思う心がなければできません。これは、現在副手として学生を指導する立場になって初めて実感していることです。

卒業生の一人として当時をなつかしく思い、また改めてミキ先生の偉大さを痛感しました。慎んで御冥福をお祈

二、教育一途の人

り致します。